

イスラエルから見た日本

——コーネル教授の日本論

滝川義人

今月号は少し趣向を変えて、日本人のユダヤ人観やイスラエル観について直接イスラエルの研究者から意見を伺うことにした。お話をいただくのは、ハイファ大学前アジア学科長のロテム・コーネル教授。イスラエル日本学会の前会長で、イスラエルにおける日本研究の第一人者である。

コーネル教授は、ヨーロッパの日本人種論の変遷を研究した著書第一巻『白から黄色へ——ヨーロッパ人の

人種思想から見た「日本人」の発見 1300年〜1735年』の日本語版が二月に刊行され、第二巻資料の補足調査のため、来日中。『対馬——日本海海戦の再評価』の日本語版出版も予定されている。

○日本に関心を持つきっかけ

滝川 コーネル先生は、イスラエルの日本学会を率いる研究者のおひとりですが、日本に関心を抱かれたとき

の頃から、太平洋戦争と、特に真珠湾攻撃ですね、日本帝国海軍に、興味を抱いていたのです。山本五十六海軍大将は、私のヒーローのひとつでした。当時、ホロコーストとヒロシマの間に、一種の類似性も感じていました。

兵役を終えて——もちろん海軍です——、バックパッカーとなり、15カ月間の世界旅行に出かけたのです。当時は1980年代中頃、イスラエルの若者の間では、ヒッチハイクの長旅が新しい伝統、まあ一種の通過儀礼になりつつありました。

私は、インド、東南アジア、オーストラリアをまわった後、日本にたどり着きました。訪れた国のなかでは、一番近代化の進んだ、洗練された国でした。

4年後学生としてここに帰るとは、その時は夢にも思いませんでした。

たが、科学万博つくば85に行ったのです。さまざまな展示のなかで、人型ロボットがピアノを弾くのを見て、自分が未来のなかにいるような感覚を抱きました。

当時日本は国際化の全盛期でした。その1カ月間私が出会った人たちは、外国人との出会いにとっても熱心でした。東京から鹿児島県の指宿郡まで、ヒッチハイクで行ったのですが、自宅に招かれることがよくありました。本当に思い出深い旅でした。

その後イスラエルへ戻り、ヘブライ大学に入学しました。心理学を専攻することに決め、まあこれが専門分野になると思っていました。第2次専攻で選んだのが、日本関連の科目です。どちらかといえば趣味ですね。ところが、ベンハミアミ・シロニー先生やエフード・ハラリ先生と

たきがわよしと●アラブ・イスラエル軍事紛争の研究者。イスラエル大使館前チーフインフォメーションオフィサー、中東報道研究機関(MEMRI)日本代表。ミルトス刊の著書に『日本型思考とイスラエル』、訳書に『深淵よりラビ・ラウ回想録』『甦りと記憶』『ケース・フォー・イスラエル』他多数。

っかけは、何ですか。

コーネル教授 生まれつき日本に関心がある人なぞいません。ほかの国についてもそうですね。それでも私の場合、かなり幼い頃から、関心を持ち始めました。高校の教師だった父親は、今は故人となりましたが、ヨーロッパのホロコーストに辛くも生き残り、イスラエルで海軍将校になった人で、歴史、特に第二次世界大戦史に、それこそ憑かれたように、強い関心を持っていました。家は、この関連の本で一杯でした。このような環境でしたので、私は少年

ロテム・コーネル●1960年イスラエル生まれ。ハイファ大学アジア学科教授。ヘブライ大学で東アジア学と心理学を専攻。ベルリン自由大学で1年、筑波大学で6年の研究の後、博士号を取得。1998年ハイファ大学で教職に就き、2004年に教授。早稲田大学、大阪大学、ジュネーブ大学、ミュンヘン大学の客員教授も務める。専門は日本近代史。邦訳著書に『白から黄色へ——ヨーロッパ人の人種思想から見た「日本人」の発見』（明石書店）。



いった錚々たる指導教官の薫陶を受けて、私の関心はさらに高まり始めたのです。

○日本に根強いユダヤ陰謀論

滝川 日本では、戦前戦中から1990年代まで、警戒心と奇妙な讚美の入り混じったユダヤ禍論の本が出版されてきました。ユダヤ人と日本人有志による抗議で、だいぶ少なくはありますが、それでもマイナーではあります。ユダヤの陰謀やユダヤマネーの世界征服を唱える人がいます。先生はこの現象をどうお考えですか。

コーネル教授 ほとんどの日本人は、致し方のないことですが、ユダヤ人に出会ったこともなければ、ユダヤ人の歴史や文化もよく知りません。ユダヤ人は世界総人口の0・2%に過ぎません。日本在住のユダヤ人はわずか1000人ほどで、日本人の0・001%にも達しません。それに加えて、イスラエルを訪れる日本人は極わずかです。自分の

体験を通じた見解の立てようがなかったのです。

それでも、日本の開国と近代化の始まりと共に、多くの日本人がイメージとしてのユダヤ人像を形成してきました。そのイメージは、もともとはヨーロッパから輸入されたものですね。キリスト教の教義とその時代の社会構造を反映したもので、大変ネガティブなイメージです。

それと同時に、アメリカの歴史家ユーリ・スレスキンが、自著『ユダヤ人の世紀』(The Jewish Century, 2004)で強調しているように、20世紀に入って、ユダヤ人は極めて卓越した影響力のある存在になりました。この時代に異才を放つ人材を輩出したのは、科学、文化、実業の世界だけではありません。ユダヤ人を先祖に持つ優れた政治家や革命家が続々と生まれました。

この目立つ才能が日本で見逃されることはなく、たくさんの日本人が

アインシュタインやフロイト、あるいはポスト構造主義の哲学者ジャック・デリダを崇拜し、ヤコブ・シフ(日露戦争時に戦費調達に協力)、キッシンジャー、あるいはフェイスブックを立ち上げたマーク・ザッカーバーグを尊敬しました。

かくも非凡な人を輩出するのはどうしてかと驚嘆し、それが嵩じて「ユダヤパワー」や「ユダヤの陰謀」に行き着く人も出てきました。

その結果、日本ではユダヤ肯定主義(Philosemitism)と反ユダヤ主義(Antisemitism)のはっきりした混合が見られます。いずれも、ユダヤ人が存在しないところでの議論です。時には、「同居」といいますか、同じ人の中に、ユダヤ人に対する讚美と恐怖が入り混じっていることもあ

ります。

日本では、1940年代前半や1980年代後半といった時代には、ネガティブな態度が優勢でした。しかし、幸いなことに暴力的な憎悪ではなかった。この人たちの主たる捌け口、つまり表現手段は出版物で、ユダヤ人に対する暴力はありませんでした。

私の見解では、この反ユダヤ主義はユダヤ肯定主義と同様に、ユダヤ人との日常的つき合いから生まれたものではありません。対ユダヤ関係というよりは、むしろ外の世界、特に欧米との関係、欧米に対する恐れを反映していると思います。ユダヤ人は、現実の姿が分からない存在であり、どうもうまくやっているらしいが、海外では憎悪されているというわけで、手っ取り早い標的になるのです。

この意味で、ユダヤ人に対する恐怖は、そしてまたユダヤ人に対する不相応な愛は、ユダヤ人についてよりも日本について語っているのです。この問題に私が多大な関心を抱いている理由のひとつは、そこにあります。

○国交樹立後70年の歩み

滝川 今年日本とイスラエルは国交樹立70周年を迎えます。60年代をみますと、キブツに行く若者や学術、宗教上の限定的交流を除けば関係は希薄でした。それでも、砂漠の緑化、ヒスタドルート(イスラエル労働総同盟)主導による協同組合方式の事業経営といった肯定的イメージがありました。しかし、ヨムキブール戦争(第四次中東戦争)に伴うアラブの石油戦略の発動で状況が変わってきました。あまり表に出なかった日本政府

が、アラブ寄りの立場を鮮明にしましたし、孤軍奮闘して国を守るという肯定的イメージが後退し、イスラエルのパレスチナ占領とか弾圧を唱える人々が、前面に出てきます。この点についてはいかがでしょうか。

コーネル教授 70年前、日本とイスラエルが国交を樹立した(1952年5月15日)当初から、日本・イスラエル関係は、日本の戦略地政学的ニーズに影響されてきました。イスラエルは、両国関係でいえば弟分のパートナーとして、この件についてほとんど何も言えなかった。

1950年代、そしてその後の数十年間、日本は発展拡大する経済を動かすため、エネルギーを多量に必要とし、その石油の大半は中東から輸入されていました。さらに、イスラエルを支持しない諸国に、日本の大きい輸出市場がありました。国交

を樹立してから日本がイスラエルに公館を開設するまで（1955年）、3年かかっていますが、この経済的動機がその背景にあります。

同じように、アラブの石油禁輸に対する恐れもありました。これは、1973年10月に起きましたね。このような背景があって、日本の自動車メーカーは、スバルを除いて長い間イスラエルに進出しませんでした。

しかしながら、1980年代になりますと、変化のきざしが見え始めます。それでも、本格的な前進が見られるのは、湾岸戦争の後ですね。

この紛争は、アラブ世界が最早一枚岩ではないことを物語り、アメリカ合衆国（イスラエルの支援国）一強の時代となって、イスラエルとの経済関係にかかるリスクが低いことを示しました。

実際問題、この30年間を見ます

○日・イ関係今後の展望

コーネル教授 確かに、日本は中東のエネルギーに依存しており、イスラエルに敵意を持つ諸国の比較的大きい市場を優先することから、依然として慎重にならざるを得ない。その事情が分からないわけではありませんが、それでも私には確信があります。今後、日本とイスラエルの関係には、もっと大きい展望が開けてくると思います。中東におけるイスラエルの戦略地政学的立場は、だんだん強くなってきており、経済力もつけているので、もっと緊密な関係への見通しが立ってくるのです。

2020年だけで、イスラエルはアラブ連盟メンバー4カ国と外交関係を樹立しました。バーレーン、アラブ首長国連邦（UAE）、スーダンそしてモロッコですね。サウジアラビアすらイスラエル機の領空飛行を

と、日本・イスラエル関係の前進がはつきり確認できます。日本の首相が4回（1994年、2006年、2015年、2018年）イスラエルを訪問しているのも、ひとつの指標です。それだけではありません。通商分野でも、そのスケールが上がっています。最近になりますと、日本の対イスラエル投資が、目を見張るほど急増しています。その対イ投資は、2020年に11億ドルの新記録を達成しました。ところが2021年の投資は29億ドル、実に3倍近い増加です。

この発展があり、互いに相手を尊敬する明らかな姿勢がありながら、緊密な同盟はおろか、日本はイスラエルを依然として普通の国とは見なしていません。これはいくつかの場面で確認できます。

国連の場では、イスラエルに関わ

認めています。

今日すでに日本とイスラエル双方の企業が緊密に提携しており、企業間の協力が進んでいます。イスラエルに進出して事務所を構える日本企業とブランドは、2021年現在で97社、2015年には15社でしたから増加度が分かるといえます。比較的新しい進出企業には、大手の電気通信事業NTT、コングロマリット（複合企業）のソフトバンクの参入があります。

中東の様相、空気が変わりつつある現在、私は日・イ協力は、今後もっと拡大すると予想しています。

それでは、それがどう機能するかですが、中にはこの関係を割り切った見方で説明する人もいます。つまり、イスラエル側が最先端技術や未完成のアイデアを提供し、日本側がそれを発展させ製品化するとい

る討議での投票傾向がそうです。イスラエルからこれといったウエポン・システムを調達したこともありません。日本人でイスラエルを訪れる人が極めて少ないという事実にも、見て取れます。コロナ前でも年間わずかに1〜2万ですね。



2014年に来日して安倍首相と会談した
ネタニヤフ・イスラエル首相（当時）

う協力の仕方です。

もちろん、現実にはもっと複雑ですし、協力もさまざまなやり方で行なわれるでしょう。日本の特許はイスラエルのものよりずっと多いし、イスラエル人が日本から学ぶべき点多々あります。それと同時に、日本の企業は、今日イスラエルにみないぎるダイナミックな躍動感と起業家精神に瞠目しています。

過去、思いきったことをする大胆な精神を持っていた日本は、恐らくインスピレーションを求めているのでしよう。関係の動機や形態はどうであれ、この協力は双方にとって利益になる。私はそう確信しています。
滝川 貴重なご意見ありがとうございます。



『日本とイスラエル』
滝川 義人 著 ミルトス
1980円